

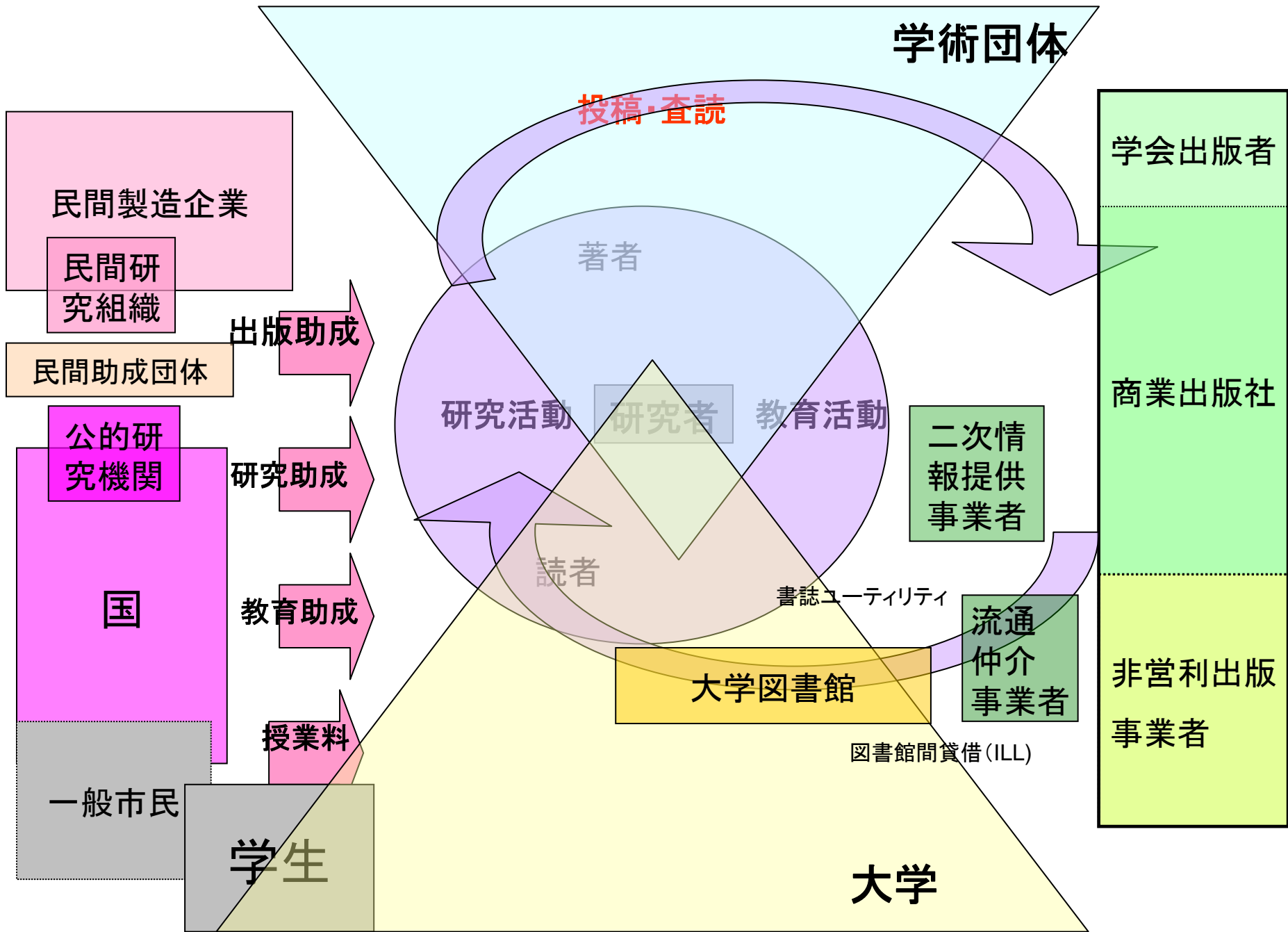
# 大学における学術情報の歴史と未来

土屋俊  
(千葉大学)

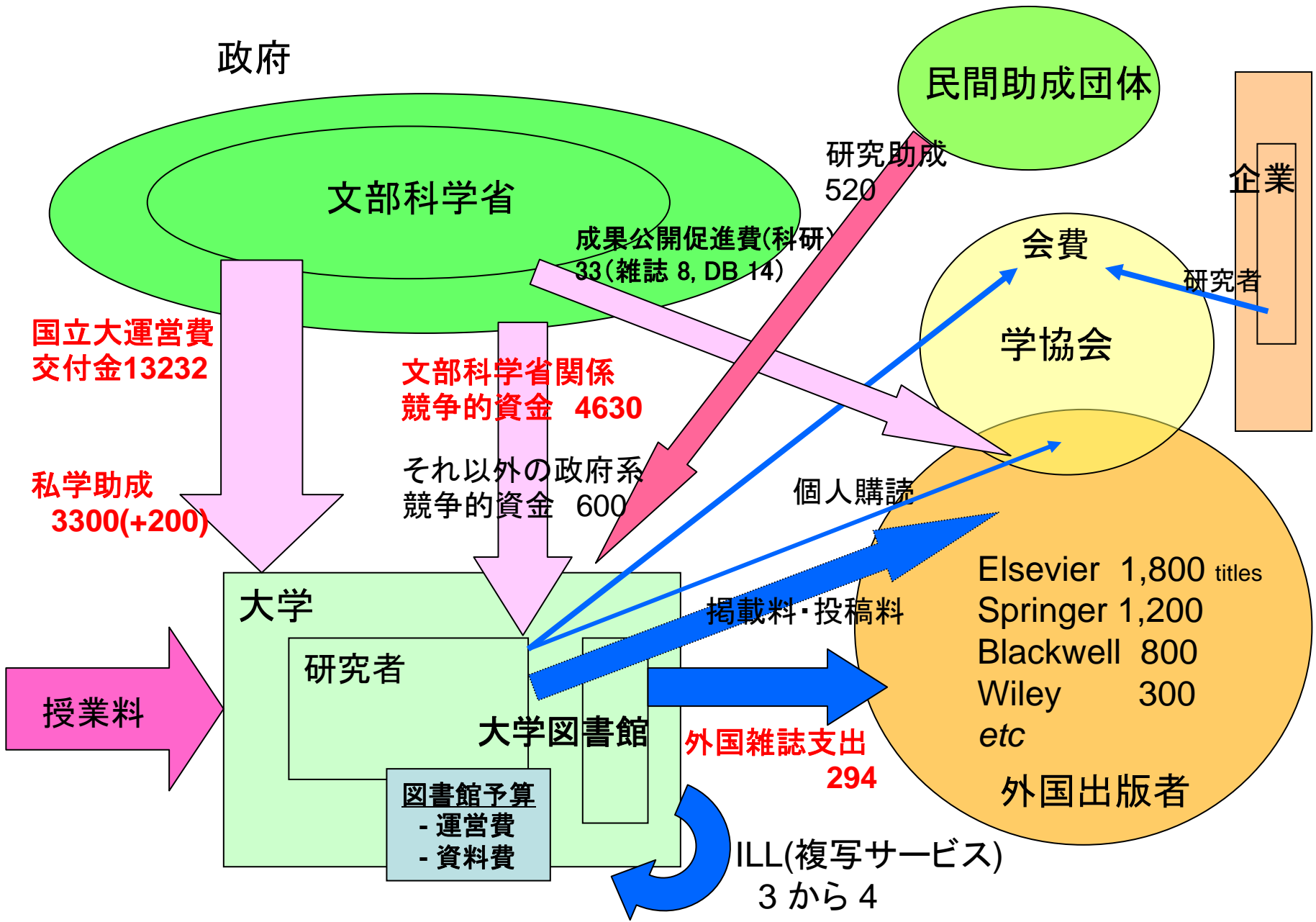
京都大学図書館機構発足記念講演会  
2005年11月16日

# もくじ

- 学術情報流通の概念モデルと経済モデル
- 国際的動向
  - 「電子ジャーナル問題」時代の終焉
  - 「オープン・アクセス」の新展開
- 国内的動向
  - 電子化の遅れ
  - 紀要・学会誌の行方
- 大学の対応
  - 図書館コンソーシアムの成立と学内購読意思決定
  - 機関リポジトリ
- これからの課題



# 日本における研究資金と外国雑誌購読の流れ(単位:億円、ほぼ2004年頃)



# 要するに

- 研究者が研究成果を公表するために著者として
- 専門分野の維持振興のための集団である学術団体に投稿
- その学術団体が責任をもって同輩専門家(ピア)による査読、選別
- 編集・印刷・頒布
  - － 学術団体自ら
  - － 商業出版社を通じて
  - － 非営利の出版者を通じて
- 購読
  - － 研究者個人が個人購読
  - － 研究者が所属する大学等の図書館が機関購読
    - 学術研究の一層の振興のために研究者に提供
    - 次世代へ知識を伝える高等教育の一環として学生に提供
    - 補完する機能として、大学自体よる「紀要」や、主として大学図書館が共同して行う「図書館間協力による貸借」「目録を共有するための書誌ユーティリティ」
    - 冊子体雑誌の保存によって、人類の知的遺産を保存・継承する
- 再生産
  - － 研究者による論文の生産
  - － 人材を社会へ

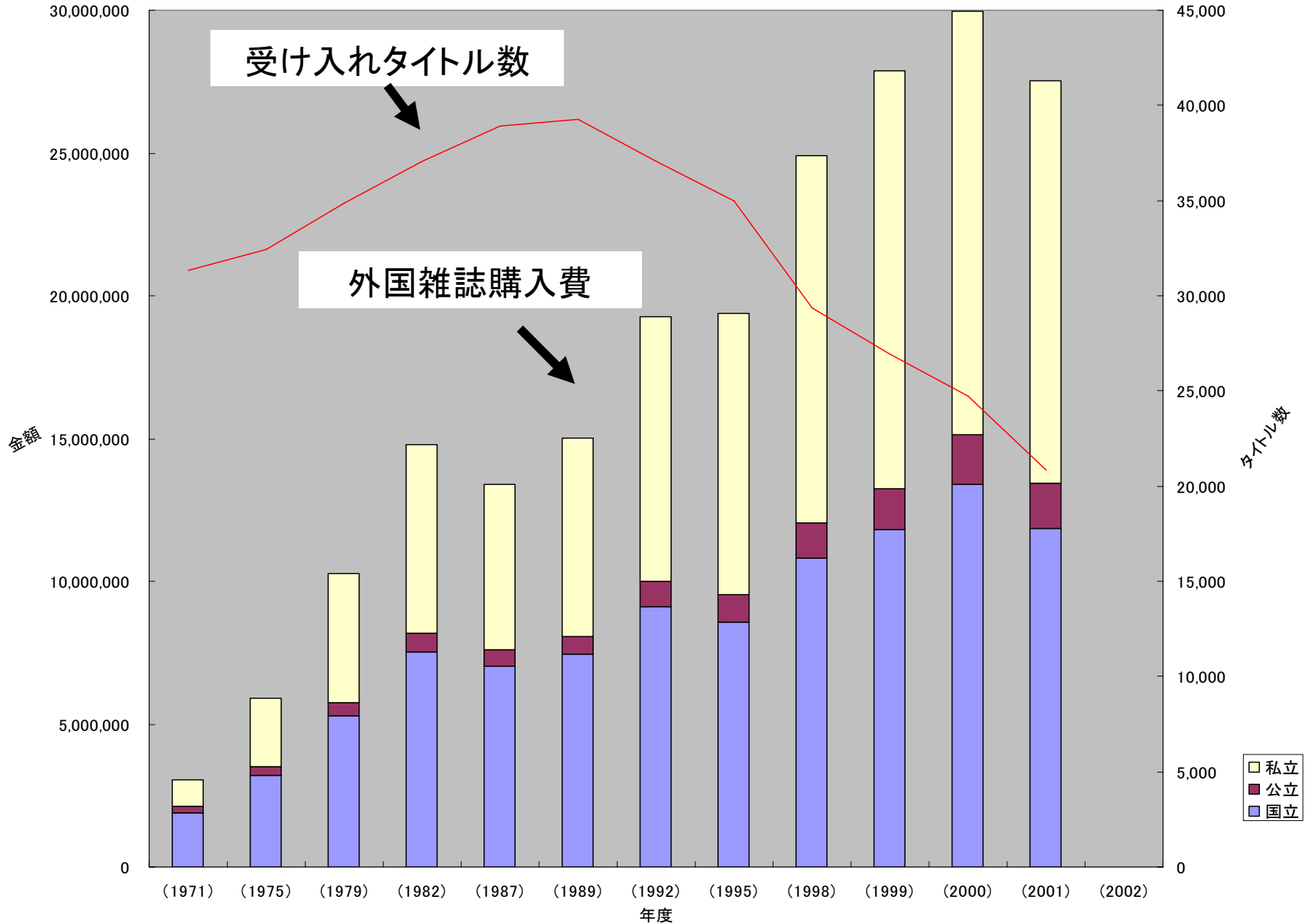
# 90年代の「危機」と「夢」

- 危機＝雑誌価格高騰
  - － Serials Crisis(分析はまだこれから。欧米と日本の違い)
- 夢＝電子化とインターネットの時代
  - － NII/NSFの「電子図書館」、日本の「電子図書館」
  - － インターネットの社会インフラ化
  - － 電子ジャーナルの登場
- 認識のミスマッチ(後知恵ですが、、、)
  - － 「電子ジャーナル」は危機の解決手段だったが、それを危機の亢進と誤解(アメリカの図書館員)

単位:千円

# 日本国内図書館の外国雑誌購入費および受入れタイトル数

但し1982年度までは和雑誌も含む



# 電子ジャーナルによる新しい認識

- 電子ジャーナルって、実は何？
  - サーバから論文情報を利用者に直接(サイト)ライセンス
- 学術情報の粒度
  - タイトル単位から論文データベースへ
- 学術情報流通の「ビジネスモデル」
  - 誰が費用を負担するか(出版流通モデルの崩壊:支払いも、集金も)⇒オープンアクセス
- 大学図書館の役割
  - 物品管理からの解放、じゃ何やるの？
- 仲介的存在の役割の変化あるいは消滅
  - 代理店・取次ぎ・「書店」・(実は)図書館
- 大学の役割
  - 知の拠点として、そして、日本では大学改革

# 電子ジャーナルとは？

- 物品購入契約から使用許諾契約(Licensing)へ
  - とくに、インターネットを經由して利用される場合。そして、それが今後も最も一般的(いわゆるパッケージ系電子出版物は過渡的存在だった)
- 利用者(Authorized user)の定義
  - **サイト・ライセンシング**⇒大学への帰属を前提
  - (ベンダーから見て)機関購読からの自然な移行)
  - (大学の中では)痛みの伴う負担の見直し
  - 一方で、いわゆるビッグ・ディールで効果的な予算活用(買えなかったタイトルが読める)
  - **しかし、サイトライセンシングである以上不可避**

# 情報の粒度の変化(物からの脱却)

- タイトルによる予約購読とは何だったのか
  - QuarterlyでもWeeklyでも1タイトル?
  - 1号を全部読む研究者はいたのか?
  - 巻・号・ページは参照のためだけ?
- 利用者支援の様態の変化
  - かつて、新着号の配架・コンテンツアラート(?)・製本雑誌の配架・保存
  - 電子ジャーナルだと、配架不要・アラートは出版者の仕事・製本も不要
  - 論文そのものへの誘導(レゾルバ、Scopus、etc)

# 利用統計の登場

- 利用した記録が残るという初めての事態
- 費用対効果の算出が可能
  - 課金するためではないはず
- ベンダー間比較の可能性
- わかってきたこと
  - 実はほとんどのタイトルが利用されている(わずかしかなかったという事は不要であることを意味しない)
  - 依然として利用の絶対数が増えている
  - (日本の)ILLより安くなっている

# ビジネス・モデル

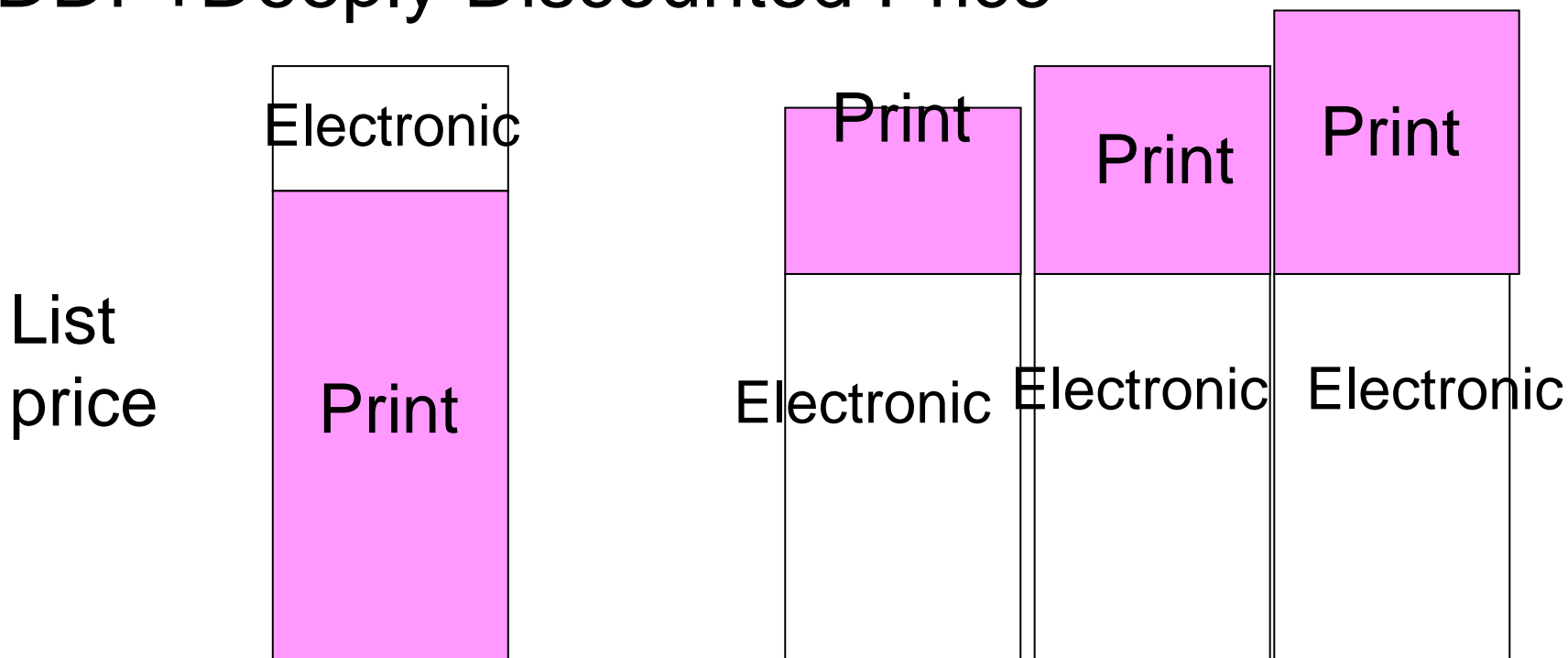
- 雑誌価格高騰の「理由」:
    - 研究費の増加⇒論文生産量の増加⇒ページ数の増加⇒製造コストの上昇⇒単価の上昇
    - 単価の上昇⇒購読能力不足による購読中止⇒経費回収元の数の減少⇒単価の上昇⇒悪循環
  - そんな理由は消えた？
    - ページ数の増加は製造コストを上げるか？
    - たくさん使われると製造コスト一定で、単価は下がる
    - ただし、設備投資
    - ただし、商業出版者から原価計算は出てこない(無理？)
- ⇒もはや、価格上昇の理由はないはず

実際、その例が出てきている  
⇒ 雑誌価格高騰の時代の終焉！

- 2006-2008Springerの提案
  - 2006年で2005年Base Valueの105%
  - 2007年、2008年はそのまま値上げなし
  - 全タイトルへのアクセス
  - わずかの一時払いで過去分すべてへのアクセス(OJA)
- 2006-2008OUPの提案
  - 2006年は2005年の支払額の92.5%
  - 2007年、2008年はそのまま値上げなし

# DDPというトリック: 重要なのはElectronicのディスカウント

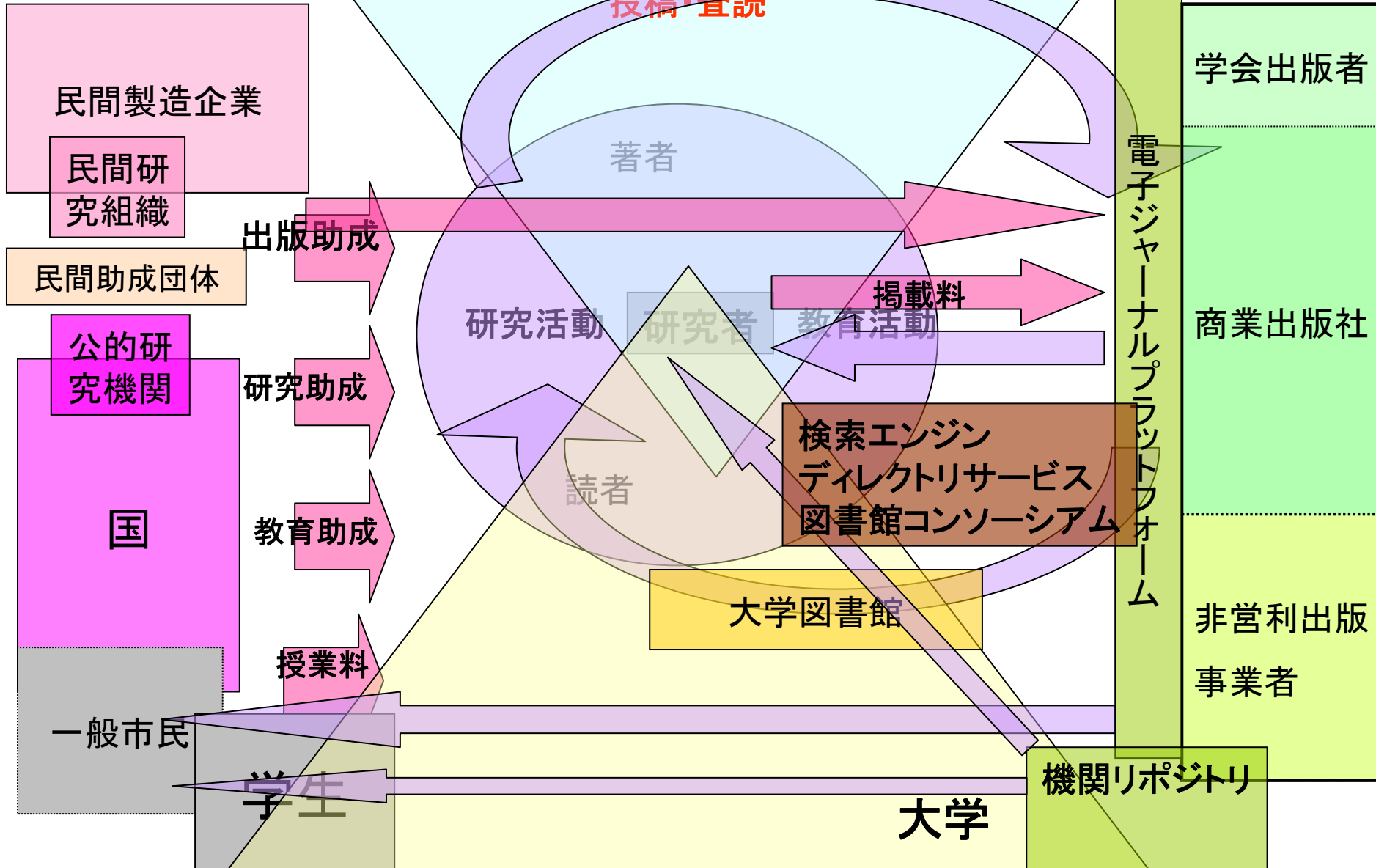
- DDP: Deeply Discounted Price



# 対応できていない人々

- 大学あるいは大学図書館
  - 保存のためには紙がよいという信仰
    - 酸性紙、火事、水害、注意の分散(確率的保存?)
  - いらないものの金を払わないという信仰
    - 読めれば読むくせに、、、、
- 学会系出版者
  - 利用促進 (Impact factor) のための電子配信
  - 結果として、印刷体キャンセル
  - BioOneの悲劇?

学術団体



# 学術資料全面電子化の時代へ

- Google Printの発足と停滞
  - 図書館資料の電子化と著作権問題
- Open Content Allianceの発足
- アメリカの機関リポジトリの動向
  - 自館資料の電子化
  - 日本にとってはいつか来た道？
    - メタデータ
    - 教育利用
- 電子ブックへの展開

# 電子vs紙の不毛な論争

- もちろん、「紙」はなくならない
- しかし、紙の優位性の議論は本当だろうか？
  - 紙の方が保存性に優れている？
    - 現在は、購入者(図書館)が勝手にとっておいているだけ
    - 酸性紙、災害があればどうせだめ
  - 電子の方が脆弱である？
    - ちゃんとしたバックアップを作ることは可能。複製をつくることは紙よりも楽
    - 作る側が責任をもって保存
  - パラっとめくれるvsでも、検索はできない
  - 利用なき保存なし

# 「先導的電子図書館プロジェクト」再考

- 自館資料の画像電子化
  - (奈良先端)、京都、筑波、神戸、東工大、図情大
  - データベースとして提供 (Deep Web型) ⇒ グローバルなメタデータが作られていない
- 「発信」
  - 誰に対して？
  - 何のために？
- 図書館のプロジェクトでは本当はなかった

# 電子資料を中心とした基盤整備

- 大学として
  - － ライセンシング経費に関する合理的思考
    - 学内予算の組みなおし
  - － 教育のスタイルの革新
    - 監禁型教科書丸呑み学習からの脱却
    - 自分で勉強する学生を育てる(知識社会での必須能力)
    - (建物としての図書館は勉強する場となる)
  - － 研究のインプット・アウトプット制御の主体的取り組み
    - 今までは、いわば垂れ流し(「経費」だから)
    - インプットを投資と考え、アウトプット(論文、知財)が見える時代へ(「論文」でよいというのはうれしいはず)
    - 機関リポジトリ

# 電子資料を中心とした基盤整備

- 大学図書館の役割は？
  - 電子資源管理手法の確立、たとえば
    - ライセンシング資料の管理
    - 自館電子資料との接合
  - 電子資源利用環境の確立、たとえば
    - ブラウザー？ Google？
    - 論文単位、段落単位(事典項目単位)のナビゲーション
  - 図書館間協力の新しい姿
    - 文献複写サービスは不要になる
  - 大学生産資料の保存と発信のための電子化
    - 過去のもの電子化
    - 他館資料の利用促進
    - 恒久保存への共同的取り組み